



中部の

エネルギーを 築いた

人々

矢作水力の土木技師から日本発送電総裁
となった 大西 英一

大西英一（1889～1955）は、矢作水力を経て、昭和22年日本発送電総裁となった土木技師である。ダム土木の権威で、工学博士であった。日本発送電総裁の辞任後は、土木学会会長、電力中央研究所理事長、発電水力協会会長などを務めた。

大西は、鉄道官吏であった父の福井勤務時代、明治22年12月に福井県に生まれた。愛知県第一中学校を卒業後、名古屋高等工業学校土木科に進んだ。学校時代は成績優秀で特待生となり、テニス、野球、剣道など万能スポーツマンとして鳴らした。青春時代を名古屋で送り、両親の住まいもあった名古屋を「わがふるさと」のように思っていた。明治45年3月名古屋高等工業学校卒業後は、父の関係で鉄道院に奉職し、四国等で鉄道建設に携わった。



大西英一
（『電力中央研究所二十五年史』
昭和53年）

矢作水力土木技師



石川栄次郎
（『流れとともに』昭和57年）

大正8年3月、大西は矢作水力に移った。矢作水力入りは、名古屋高等工業学校土木科の2年先輩で、生涯の友人であった石川栄次郎の導きによる。石川は、逓信省の水力調査官を経て、福沢桃介が社長を務める名古屋電灯に入社した。臨時建設部に配属されて木曾川の水力開発に携わり、矢作水力の創設事務にも携わっていた。矢作水力の発足にあたり、石川は土木技師として大西を強く推薦した。石川の話を受け、かねて電力土木に関心

があった大西は喜んで承諾した。

矢作水力入社後、30歳の青年技師として大西は矢作水力が最初に手がけた下村発電所（大正9年12月運転開始、4,200kW）の建設現場に配属され、次いで飯田洞発電所（大正10年10月、630kW）、そして戦前では矢作川水系最大であった上村発電所（大正14年



下村発電所
（伊藤勲『電力絵葉書博物館』）



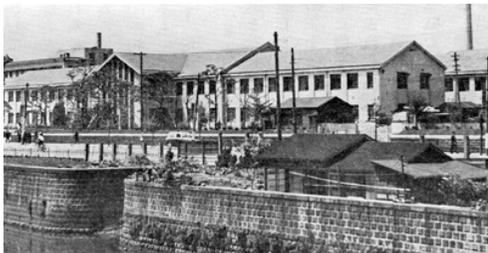
上村発電所(筆者撮影)

11月運転開始、9,600kW) などの建設に携わった。法被姿で現場工夫と一緒にあって測量に従事し、現場員の住居確保に尽力し、現場員の心を掴んだ。インガソール社製の新

型機械を導入したときは、毎日5号隧道の坑口を見回り、切端で1時間以上を過ごしたという。上村発電所の建設後は、名古屋の本社へと移り土木課長を務めた。昭和6年11月、矢作水力が天竜川電力を合併した後は、豊発電所(昭和11年12月運転開始、13,600kW)、和合発電所(昭和12年10月運転開始、3,000kW)、平岡発電所(矢作水力時代には完成せず、日本発送電を経て中部電力に引き継がれ昭和27年1月完成)など、天竜川筋の発電所の建設に取り組んだ。この間、欧米の水力技術を視察し、最新の技術の導入に努めた。昭和15年には取締役へと栄進している。

日本発送電総裁

電力国家管理に伴い矢作水力は解散し、昭和17年4月、大西は新たに発足した日本発送電株式会社へと移った。土木技術の最高責



日本発送電本社
(['発送電株式会社解散記念アルバム']
(['日本発送電株式会社史 総合編』昭和29年)

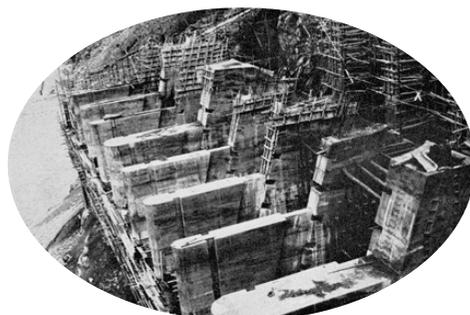


日本発送電株式会社株券
(['日本発送電株式会社史 総合編』昭和29年)

任者として、水路部長を経て、19年には土木部長となり、20年には理事に選任された。昭和22年6月、新井章治の後任として第4代総裁となった。戦後の民主化ブームのなか、選出は理事による無記名投票で行なわれ、大西がトップの得票を得て選任された。技術者としての識見や部下の統率力などで社内の人望があったことを窺わせる。日本発送電では社内出身の最初で最後の総裁であった。

大西は、総裁として3年3ヶ月に亘り、社

内の民主的運営に努め、戦後の難局の処理にあたった。戦争で荒廃した設備の復旧を進め、送電損失の減少や火力熱効率の向上をはかり、戦前戦後を通じて発電量は最高を記録した。熾烈を極めた労働問題に対処し、懸案であった電源開発工事も緒を開いた。しかし、昭和25年9月電力再編成問題をめぐって、配電会社と対立し、再編成を受け入れなければ復興開発資金は止めるとのGHQの意向を受けて辞任した。



日本発送電時代に建設が進められた平岡発電所
（『発送電株式会社解散記念アルバム』）

電力中央研究所理事長、土木学会会長

日本発送電を辞任した後、大西は昭和26年11月電力技術研究所（翌年電力中央研究所に改組）の理事長となり、電気事業の総合的研究機関の育成に努めた。電力中央研究所の英文名Electric Power Research Laboratoryの頭文字「E P R L」を組み合わせた電力中央研究所のロゴマークは、社内募集で決まったが、大西が応募したデザインであった。昭和23年には論文「超高压隧道と我国における湖沼と新技術の導入など発電水力について」をまとめ工学博士の学位を授与されている。昭和26年には土木学会会長（第19代）、昭和27



発足当時の電力技術研究所
（前掲『電力中央研究所二十五年史』）



大西理事長が考案した電中研マーク
（前掲『電力中央研究所二十五年史』）

年8月には発電水力協会会長に就任した。昭和26年には第4回国際大ダム会議の日本代表を務めている。

大西は寡黙で責任感が強く、人情家であり、部下の面倒をよく見部下からも慕われた。生来頑健で現場の仕事向きの体力を有する一方、学究肌で、発電水力技術の発展に先駆的役割を果たした。大西は、晩年日本大学の教授として教壇に立ったが、講義用ノートを纏めるのが楽しいと語っていた。昭和30年12月、66歳で逝去した。同年藍綬褒章が授与されている。

（浅野 伸一）